(19)日本国特許庁(JP)　(12)特　許　公　報(B2)　(11)特許番号
特許第6973418号
(P6973418)
(45)発行日　令和3年11月24日(2021.11.24)　(24)登録日　令和3年11月8日(2021.11.8)

(51)Int.Cl.　F I
B65D 33/38 (2006.01)　B65D 33/38

請求項の数 5　(全 13 頁)

(21)出願番号　特願2019-960(P2019-960)
(22)出願日　平成31年1月8日(2019.1.8)
(62)分割の表示　特願2017-34525(P2017-34525)の分割
原出願日　平成29年2月27日(2017.2.27)
(65)公開番号　特開2019-48674(P2019-48674A)
(43)公開日　平成31年3月28日(2019.3.28)
審査請求日　令和2年1月29日(2020.1.29)
(31)優先権主張番号　特願2016-217260(P2016-217260)
(32)優先日　平成28年11月7日(2016.11.7)
(33)優先権主張国・地域又は機関　日本国(JP)

(73)特許権者　313005282
東洋製罐株式会社
東京都品川区東五反田２丁目１８番１号
(74)代理人　100153497
弁理士　藤本　信男
(74)代理人　100110515
弁理士　山田　益男
(74)代理人　100189083
弁理士　重信　圭介
(72)発明者　三浦　崇
神奈川県横浜市鶴見区矢向１－１－７０
東洋製罐株式会社テクニカルセンター内
(72)発明者　石川　将
東京都品川区東五反田２－１８－１　東洋製罐株式会社内

最終頁に続く

(54)【発明の名称】スパウト付きパウチ

(57)【特許請求の範囲】

【請求項１】

パウチ本体の外縁の一部である装着縁部にスパウトを装着したスパウト付きパウチであって、

前記パウチ本体は、前記装着縁部に沿って形成され前記パウチ本体の表裏のフィルムの間に前記スパウトの取付基部を配置した状態で表裏のフィルムを熱溶着して前記スパウトを取り付ける装着シール部を有した外縁シール部と、前記外縁シール部の前記装着シール部のパウチ平面方向の内側において、スパウト本体の中心軸を延長させた仮想線を挟んで左右両側に形成された一対の流路制御シール部とを有し、

前記仮想線に直交する方向において、少なくとも一方の前記流路制御シール部の、前記仮想線とは反対側の側部には、内容液を収容する収容部に連通する未シール部が隣接して形成され、

前記スパウトは、前記取付基部よりもパウチ平面方向の内側に位置する部分を有しておらず、

前記パウチ本体には、内容液の注出を中断する時に指で押える位置を示す位置マークが設けられ、

内容液の注出を中断する時に指で押える位置を示す前記位置マークは、前記仮想線上において、前記一対の流路制御シール部よりもパウチ平面方向の内側に位置する箇所を中心として形成されていることを特徴とするスパウト付きパウチ。

【請求項２】

前記未シール部は、前記仮想線に直交する方向において、前記一対の流路制御シール部の一方の、前記仮想線とは反対側の側部に形成されていることを特徴とする請求項１に記載のスパウト付パウチ。

【請求項３】

前記未シール部は、前記仮想線に直交する方向において、前記各流路制御シール部の、前記仮想線とは反対側の側部にそれぞれ形成されていることを特徴とする請求項１に記載のスパウト付きパウチ。

【請求項４】

前記各流路制御シール部は、前記装着シール部に連続して形成されていることを特徴とする請求項１乃至請求項３のいずれかに記載のスパウト付きパウチ。

【請求項５】

前記パウチ本体は、上縁部と、第１の側縁部および第２の側縁部と、下縁部とを有し、

前記スパウトは、前記上縁部、前記第１の側縁部、または、前記上縁部および前記第１の側縁部の間の角を切り欠くことで形成された斜縁部に装着され、

前記外縁シール部は、前記第２の側縁部に沿って形成された第２の側縁シール部を有し、

前記第２の側縁シール部には、使用者による前記スパウト付きパウチの把持位置を示す把持部が設けられていることを特徴とする請求項１乃至請求項４のいずれかに記載のスパウト付きパウチ。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【０００１】

本発明は、パウチ本体にスパウトを装着したスパウト付きパウチに関する。

【０００２】

従来より、フィルムを重ね合わせて形成したパウチ本体に注出口としてのスパウトを装着したスパウト付きパウチは、本品（詰め替え先の容器）に詰め替えられる洗剤やシャンプー等の内容液を収容する詰め替え用容器等の用途で広く使用されている。

【０００３】

近年、詰め替え用容器の用途においては、本品の所定量以上の、複数回分の詰め替え容量の内容液を収容する大型のスパウト付きパウチが普及してきている。このような大型のスパウト付きパウチにおいては、本品に詰め替える際に、スパウト付きパウチ内の内容液が本品の外に飛び出てしまうことや、飛び出した内容液で本品を倒してしまうことを防止するため、または、詰め替え作業の途中で本品内の液量を確認するために、内容液の注出を一時的に止める必要が生じることがある。

【０００４】

そして、内容液の注出を一時的に止める時には、その都度、スパウトを上方に向ける等、内容液の注出が止まるようにスパウト付きパウチの姿勢を調整するのが一般的である。しかし、このような動作を繰り返すのは使用者にとって手間であり、詰め替え動作を繰り返すことにより本品を倒してしまう危険性が増すことから、スパウト付きパウチの姿勢を変えることなく、内容液の注出を一時的に止める機能が要望されている。

【０００５】

このような内容液の注出を一時的に止める機構としては、特許文献１に開示されるように、注出口として機能するスパウトからある程度離れた位置に、シール部間の間隔を狭めた絞り部分を形成し、パウチ本体の表裏から当該絞り部分を使用者の指によって挟むことで、内容液の注出を一時的に止めることが可能な機構が知られている。

【先行技術文献】

【特許文献】

【０００６】

【特許文献１】特開２００８－３７４７１号公報

【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００７】
ところが、特許文献１に開示される機構では、内容液の注出を一時的に止めるために、シール部間の間隔を狭めた絞り部分を挟んだ際に、絞り部分の表裏のフィルムが密着してしまう。このため、内容液の注出を再開させようとした場合に、表裏のフィルムの密着が解除されず、内容液の注出性が低下してしまう虞があった。
【０００８】
そこで、本発明は、これらの問題点を解決するものであり、簡素な構成で、内容液の注出の中断性、注出の勢いの調整性、再注出性を向上することが可能なスパウト付きパウチを提供することを目的とするものである。
【課題を解決するための手段】
【０００９】
本発明は、パウチ本体の外縁の一部である装着縁部にスパウトを装着したスパウト付きパウチであって、前記パウチ本体は、前記装着縁部に沿って形成され前記パウチ本体の表裏のフィルムの間に前記スパウトの取付基部を配置した状態で表裏のフィルムを熱溶着して前記スパウトを取り付ける装着シール部を有した外縁シール部と、前記外縁シール部の前記装着シール部のパウチ平面方向の内側において、スパウト本体の中心軸を延長させた仮想線を挟んで左右両側に形成された一対の流路制御シール部とを有し、前記仮想線に直交する方向において、少なくとも一方の前記流路制御シール部の、前記仮想線とは反対側の側部には、内容液を収容する収容部に連通する未シール部が隣接して形成され、前記スパウトは、前記取付基部よりもパウチ平面方向の内側に位置する部分を有しておらず、前記パウチ本体には、内容液の注出を中断する時に指で押える位置を示す位置マークが設けられ、前記位置マークは、前記仮想線上において、前記一対の流路制御シール部よりもパウチ平面方向の内側に位置する箇所を中心として形成されていることにより、前記課題を解決するものである。

【発明の効果】
【００１０】
本請求項１に係る発明によれば、外縁シール部の内側において、スパウト本体の中心軸を延長させた仮想線を挟んで左右両側に形成された一対の流路制御シール部を形成することにより、後述するスパウト取付基部の厚みに起因して表裏のフィルムが離間するフィルム離間領域の外縁のうち、表裏のフィルムが離れた開部分を、スパウトから遠いフィルム離間領域の外縁の先端側に限定することが可能であるため、当該フィルム離間領域の外縁の先端側を指で挟むことで、内容液の注出の一時停止（注出の中断性）や内容液の注出の勢いの調整等を良好に行うことができる。
また、スパウト取付基部の厚み寸法をＸ、スパウト取付基部から作用点部までの長さ寸法をＬ、一対の流路制御シール部の作用点部間の幅寸法をＷと規定した場合に、厚み寸法Ｘ、長さ寸法Ｌ、および、幅寸法Ｗを、Ｗ／Ｘ＝１．２～２．０、および、Ｌ／Ｘ＝０．３～１．５の関係を満足するように設定した場合、フィルム離間領域の先端側を指で挟むことによる内容液の注出の中断性、および、指による挟持を解除して内容液の注出を再開させる際の内容液の再注出性を向上することができる。

【００１１】
本請求項２、３、４に係る発明によれば、内容液の注出の中断性および内容液の再注出性を更に安定的に確保することができる。
本請求項１に係る発明によれば、仮想線に直交する方向において、少なくとも一方の流路制御シール部の、仮想線とは反対側の側部に、未シール部が隣接して形成されていることにより、内容液の注出時に、未シール部内に入り込んだ内容液によって未シール部が膨み、このような未シール部の膨らみに影響を受けて、フィルム離間領域の外縁の先端側に

おいて、表裏のフィルムが互いに離れ易くなるため、内容液の良好な注出性を確保することができ、特に、内容液の注出を再開させる際の内容液の再注出性を向上させることができる。

本請求項１に係る発明によれば、指で押える位置を示す位置マーク形成されていることにより、内容液の注出の中断もしくは再注出の際に、フィルム離間領域の外縁の先端側の最適な位置を指によって確実に押さえる、或いは開放することができる。

本請求項５に係わる発明によれば、スパウトが、上縁部、第１の側縁部、または、上縁部および第１の側縁部の間の角を切り欠くことで形成された斜縁部に装着され、第２の側縁シール部に、使用者によるスパウト付きパウチの把持位置を示す把持部が設けられている。これにより、使用者がスパウト付きパウチを持ち上げつつも、スパウト近傍において上述したフィルム離間領域の外縁の先端側を指で挟むことが可能な持ち方に、使用者を誘導することが可能であるため、使用者が内容液の注出の一時停止や内容液の注出の再開を容易に操作することができる。

【図面の簡単な説明】

【００１２】

【図１】本発明の第１実施形態に係るスパウト付きパウチを示す平面図。

【図２】スパウト付きパウチを示す一部拡大図。

【図３】内容液の注出時の作用を説明する説明図。

【図４】第２実施形態に係るスパウト付きパウチを示す一部拡大図。

【図５】スパウト付きパウチの性能を評価する実験の実験結果を示す説明図。

【図６】スパウト付きパウチの変形例を示す平面図。

【図７】流路制御シール部の第１変形例を示す一部拡大図。

【図８】流路制御シール部の第２変形例を示す一部拡大図。

【図９】流路制御シール部の第３変形例を示す一部拡大図。

【図１０】パウチ本体の変形例を示す一部拡大図。

【図１１】パウチ本体に把持部を形成した変形例を示す平面図。

【図１２】把持部の変形例を示す説明図。

【図１３】パウチ本体の形状の変形例を示す一部拡大図。

【発明を実施するための形態】

【００１３】

以下に、本発明の第１実施形態に係るスパウト付きパウチ１０について、図面に基づいて説明する。

【００１４】

スパウト付きパウチ１０は、図１に示すように、重ねたフィルムの外縁を熱溶着した外縁シール部２１を形成することにより袋状に形成されたパウチ本体２０に、注出口として機能するスパウト３０を装着して構成され、洗剤やシャンプー等の内容液を収容するものである。

【００１５】

以下に、スパウト付きパウチ１０の各構成要素について、図１～図３に基づいて説明する。

【００１６】

まず、パウチ本体２０は、積層フィルムから成る、表裏２枚の胴材と逆Ｖ字型に折り曲げられた底材とを用いて、２枚の胴材の間に底材を熱溶着し、図１に示すように、上縁部と、下縁部と、一対の側縁部（第１の側縁部、第２の側縁部）と、上縁部および一方の側縁部（第１の側縁部）の角を切り欠くことで形成された斜縁部とを有したスタンディングパウチとしての全体形状を備えている。

【００１７】

外縁シール部２１は、パウチ本体２０の胴材の各縁部に沿って連続して形成されており、図１に示すように、上縁部に沿って帯状に形成された上縁シール部２１ａと、下縁部に

沿って帯状に形成された下縁シール部２１ｂと、側縁部に沿って帯状に形成された側縁シール部（第１の側縁シール部、第２の側縁シール部）２１ｃと、斜縁部に沿って帯状に形成された斜縁シール部２１ｄとを備えている。

【００１８】

スパウト３０は、スパウト本体３１とキャップ３２とにより構成され、図１や図２に示すように、パウチ本体２０の斜縁部の中央付近に装着され、具体的には、パウチ本体２０の斜縁部において、パウチ本体２０の表裏のフィルムの間に横断面形状が、図示しないが菱形のスパウト取付基部３１ａを配置した後、表裏のフィルムを熱溶着することで、斜縁シール部２１ｄを形成するとともに、パウチ本体２０の斜縁部にスパウト３０を装着している。

このように、本実施形態では、パウチ本体２０の斜縁部が、スパウト３０を装着させる装着縁部として機能し、また、斜縁シール部２１ｄが、装着縁部に沿って形成された装着シール部として機能する。

【００１９】

パウチ本体２０には、図１～図３に示すように、表裏のフィルムを熱溶着して形成され、内容液の流路を制御する一対の流路制御シール部２２が設けられている。

これら一対の流路制御シール部２２は、図２に示すように、スパウト本体３１の中心軸を延長させた仮想線Ａを挟んだ左右両側において、斜縁シール部２１ｄから外縁シール部２１の内側に向けて連続して突出するように形成されている。

各流路制御シール部２２は、仮想線Ａを基準として左右に形成されている。

【００２０】

また、各流路制御シール部２２は、図２に示すように、仮想線Ａに最も近接した部分のうち、仮想線Ａの延在方向においてスパウト３０（スパウト取付基部３１ａ）から最も遠い箇所に位置する作用点部２２ａを有している。この作用点部２２ａは、流路制御シール部２２のうち、後述するフィルム離間領域Ｒの形成態様（形状や範囲等）に、強く影響を与える箇所である。

【００２１】

また、図２に示すように、仮想線Ａに直交する方向において、各流路制御シール部２２の仮想線Ａとは反対側の側部には、表裏のフィルムが接着されていない未シール部２３が隣接して形成されている。これら未シール部２３は、内容液を収容するパウチ本体２０内の収容部に連通している。

【００２２】

次に、本実施形態のスパウト付きパウチ１０の効果について、図３に基いて以下に説明する。

【００２３】

まず、本実施形態では、仮想線Ａを挟んで左右両側に、一対の流路制御シール部２２が形成されている。これにより、図３に示すように、スパウト３０のスパウト取付基部３１ａの厚みに起因して表裏のフィルムが離間するフィルム離間領域Ｒが形成される。このフィルム離間領域Ｒの外縁のうち、スパウト３０に近い部分はフィルムが閉じた状態（表裏のフィルムが密着した状態）で維持され、スパウト３０から遠い部分はフィルムが開いた状態（表裏のフィルムが離れた状態）で維持される。図３においては、フィルム離間領域Ｒの外縁のうち、閉じた状態の部分を×で示し、開いた状態の部分を○で示している。

このように、流路制御シール部２２を形成することにより、フィルム離間領域Ｒの外縁のうち、フィルムが開いた部分（表裏のフィルムが離れた部分）が、スパウト３０から遠い部分であるフィルム離間領域Ｒの外縁の先端側（図中の○位置）のみの狭い範囲に限定することができる。

【００２４】

そして、これにより、内容液を詰め替える際において、内容液の注出時は、表裏のフィルムが離れたフィルム離間領域Ｒで注出性を保持しつつ、このフィルム離間領域Ｒの外縁の先端側（一対の流路制御シール部２２よりも約５ｍｍ～２０ｍｍ程度離れた箇所）のみ

を指で押さえることで、内容液の注出の一時停止（注出の中断性）や内容液の注出の勢いの調整等を良好に行うことができる。

【００２５】

また、本実施形態では、図３に示すように、仮想線Ａに直交する方向において、各流路制御シール部２２の仮想線Ａとは反対側の側部に、未シール部２３が形成されている。これにより、内容液の注出時に、未シール部２３内に入り込んだ内容液によって未シール部２３が膨み、このような未シール部２３の膨らみに影響を受けて、フィルム離間領域Ｒの外縁の先端側において、表裏のフィルムが互いに離れ易くなるため、内容液の良好な注出性を確保することができ、特に、内容液の注出を再開させる際の内容液の再注出性を向上させることができる。

【００２６】

また、未シール部２３が、各流路制御シール部２２の仮想線Ａとは反対側の側部にそれぞれ形成されていることにより、内容液の注出時におけるスパウト付きパウチ１０の傾け方に関わらず、一対の未シール部２３の少なくとも一方に内容液を入り込ませることが可能であるため、未シール部２３の膨らみに起因した注出の中断性および再注出性の向上の効果を安定して得ることができる。

【００２７】

また、各流路制御シール部２２が、装着シール部としての斜縁シール部２１ｄに連続して形成されていることにより、各流路制御シール部２２における表裏のフィルム同士の密着強度を安定して確保できる。また、後述する図８のように、装着シール部（斜縁シール部２１ｄ）から独立して離れた位置に、各流路制御シール部２２を形成した場合と比して、内容液の注出を止めた際に、流路制御シール部２２と斜縁シール部２１ｄとの間から、内容液がフィルム離間領域Ｒの内側に漏れ出ることを防止できる。

【００２８】

次に、本発明の第２実施形態に係るスパウト付きパウチ１０について、図４に基づいて説明する。ここで、第２実施形態では、一部構成については、前述した第１実施形態と全く同じであるため、相違点以外の構成については、その説明を省略する。

【００２９】

第１実施形態においては、図２に示すように、各流路制御シール部２２の仮想線Ａとは反対側の側部に未シール部２３が形成されていたが、これに対して、第２実施形態においては、図４に示すように、未シール部２３が形成されていない。

言い換えると、第２実施形態においては、各流路制御シール部２２の全体が、仮想線Ａに直交する方向において、（装着シール部としての斜縁シール部２１ｄに隣接する）上縁シール部２１ａおよび側縁シール部２１ｃに連続して形成されている。

【００３０】

次に、スパウト付きパウチ１０の各部の寸法関係の設定と、内容液の注出の中断性および内容液の再注出性との関係を確認するために行った実験例について、図２、図４、図５に基いて以下に説明する。

【００３１】

まず、本実験例では、仮想線Ａの延在方向におけるスパウト取付基部３１ａの底面から作用点部２２ａまでの長さ寸法Ｌ、および、仮想線Ａに直交する方向における一対の流路制御シール部２２の作用点部２２ａ間の幅寸法Ｗを図５に示す表のように様々に変化させ、フィルム離間領域Ｒの先端側を指で挟むことによる内容液の注出の中断性、および、指による挟持を解除して内容液の注出を再開させる際の内容液の再注出性を確認した。なお、図５に示す表において、幅寸法Ｗまたは長さ寸法Ｌの実寸値の左側に記載される数値は、パウチ本体２０の平面方向に直交する方向におけるスパウト取付基部３１ａの厚み寸法Ｘに対する、幅寸法Ｗまたは長さ寸法Ｌの比率を表している。

実験例に用いた試験品および評価方法については、以下の通りである。

【００３２】

＜試験品＞

パウチ本体２０のサイズ：幅２００ｍｍ×高さ３００ｍｍのスタンディングパウチ
パウチ本体２０のフィルムの層構成：外層側より、１２μｍのＰＥＴ（ポリエチレンテレフタレート）／１５μｍのＮＹ（ナイロン）／１５０μｍのＰＥ（ポリエチレン）
スパウト３０のスパウト注出孔の口径：Φ８．６
スパウト取付基部３１ａの厚み寸法Ｘ：１１．７ｍｍ
スパウト付きパウチ１０の斜縁シール部２１ｄのシール形態：未シール部２３あり（図２），未シール部なし（図４）
内容液：水１ｋｇ
＜評価方法＞
注出の中断性は、内容液の注出を止められた場合は○，内容液の注出を止められなかった場合は×とし、再注出性は、流路制御シール部なしの再注出流量と比較して同等の場合は○，７割～８割の流量で再注出を保てる場合は△，５割未満となり再注出量が低い場合は×として評価した。

【００３３】
上記の実験例の結果を図５に示す。実験例の結果からは、以下のことを読み取ることができる。
まず、未シール部２３の形成あり、形成なしの双方のスパウト付きパウチ１０において、厚み寸法Ｘ、長さ寸法Ｌ、および、幅寸法Ｗは、Ｗ／Ｘ＝１．２～２．０、および、Ｌ／Ｘ＝０．３～１．５の関係を満足するように設定されていることが望ましいことが分かった。
すなわち、上記の場合には、内容液の注出の中断性、および、内容液の再注出性の両方について、良好な結果が得られることが確認された。
なお、上記のＷ／Ｘ＝１．２～２．０、および、Ｌ／Ｘ＝０．３～１．５の範囲は、図５に示す表において太線で囲まれた範囲である。

【００３４】
また、上記の関係を満足することに加えて、更に、厚み寸法Ｘ、長さ寸法Ｌ、および、幅寸法Ｗが、Ｗ／Ｘ＝０．３Ｌ／Ｘ＋ａ（ａ＝１．１１～１．５５）の関係を満足するように設定されていることが望ましいことが分かった。この場合、注出の中断性および再注出性の両方について、より安定して良好な結果が得られる。

【００３５】
また、厚み寸法Ｘ、長さ寸法Ｌ、および、幅寸法Ｗが、Ｗ／Ｘ＝０．０４５Ｘ＋０．９７、および、Ｌ／Ｘ＝０．１５Ｘ－１.３６の関係を満足するように設定されていることが望ましいことが分かった。この場合、注出の中断性および再注出性の両方について、より安定して良好な結果が得られる。

【００３６】
なお、上述した実験例では、パウチ本体２０のフィルムの厚みが、１７７μｍ（１２μｍＰＥＴ／１５μｍＮＹ／１５０μｍＰＥ）であるものとして説明したが、パウチ本体２０のフィルムの厚みが８０μｍ～２１０μｍで設定されている場合に、図５に示す実験結果と同様の結果が得られることが確認された。フィルムの厚みが８０μｍ未満の場合は注出の中断性が低下し、２１０μｍを超えると再注出量が低下するため、前述のフィルム厚み範囲で設定すると良い。

【００３７】
また、図５に示す実験結果は、厚み寸法Ｘが１１．７ｍｍで設定されている場合の結果であるが、スパウト３０の注出孔の口径を大きくし、厚み寸法Ｘを１８．４ｍｍに設定した場合にも、図５に示す実験結果と同様の結果が得られることが確認された。このため、厚み寸法Ｘが変化した場合においても、厚み寸法Ｘ、長さ寸法Ｌ、および、幅寸法Ｗは、１１．７ｍｍの場合と同様の関係を満足するように設定すれば良いということが確認された。

【００３８】
以上、本発明の実施形態を詳述したが、本発明は上記実施形態に限定されるものではな

く、特許請求の範囲に記載された本発明を逸脱することなく種々の設計変更を行なうことが可能である。

【００３９】

例えば、上述した複数の実施形態や後述する複数の変形例の各構成を、任意に組み合わせてスパウト付きパウチ１０を構成しても何ら構わない。

【００４０】

また、パウチ本体２０の具体的態様は、如何なるものでもよく、その具体例としては、ポリエステル、ポリプロピレン、ポリアミド、ポリエチレン、ポリブチレンテレフタレート、エチレン－ビニルアルコール共重合体等の合成樹脂性フィルムや、これら合成樹脂性フィルムにガスバリア性や水分バリア性を付与したコーティングフィルム又は蒸着フィルム等の公知の合成樹脂性フィルムを積層したり、合成樹脂製フィルムに紙またはアルミ箔を積層することで形成されたもの等が挙げられる。

【００４１】

また、上述した実施形態では、スパウト付きパウチ１０が、詰め替え用容器の用途で用いられるものとして説明したが、スパウト付きパウチ１０の具体的用途はこれに限定されず、例えば、詰め替え用ではない飲料水や調味料等を収容する容器として、本実施形態のスパウト付きパウチ１０を使用してもよい。

【００４２】

また、上述した実施形態では、パウチ本体２０が、上縁部と下縁部と一対の側縁部と斜縁部とを有した全体形状を備えているものとして説明したが、パウチ本体２０の具体的形状はこれに限定されず、例えば、全体形状が四角形状や台形のものや、一部に凹凸のある異形形状等、如何なるものでもよい。また、内容液を詰め替える際のフィルム離間領域Ｒの外縁の先端側を指で押さえる作業がしやすくなるように、スパウト３０の近傍に加工を追加してもよい。例えば、図１３に示すように、パウチ本体２０の斜縁部（装着縁部）と第１の側縁シール部２１ｃとの間に、更に傾斜部（第２の斜縁シール部２１ｅ）を設ける等の加工を行うことにより、第１の側縁シール部２１ｃからフィルム離間領域Ｒまでの距離を縮めて２本の指で挟みやすくなるため、更に良好な詰め替え作業を行うことができる。

【００４３】

また、上述した実施形態では、パウチ本体２０スタンディングパウチタイプとして説明したが、ピロータイプのパウチ、ガセットタイプのパウチ、平パウチ等、様々な形態を採用することができる。また、上述した実施形態のように、積層フィルムの縁部の全て（４辺）を熱溶着してもよいし、１枚の積層フィルムを折り返してパウチ本体２０を形成する場合等には、２辺、３辺の縁部を熱溶着し、一部の縁部に熱溶着を施さなくてもよい。

【００４４】

また、上述した実施形態では、図２に示すように、スパウト３０が、パウチ本体２０の斜縁部に装着されているものとして説明したが、スパウト３０の装着位置は、これに限定されない。例えば、図６に示すように、パウチ本体２０の上縁部にスパウト３０を装着して装着縁部として機能させ、上縁シール部２１ａを装着縁部に沿って形成された装着シール部として機能させてもよい。

【００４５】

また、上述した実施形態では、各流路制御シール部２２の隣に、未シール部２３がそれぞれ形成されているものとして説明したが、図７に示すように、未シール部２３は、流路制御シール部２２のいずれか一方の隣に形成されていればよい。この図７の形態においては、パウチ本体２０の側縁部側に幅広の制御シール部２２が、上縁部２１ａ側にのみ未シール部２３が形成されている。このような形態とすることにより、未シール部２３側を本品の口部側に位置させて内容液の詰め替え作業を行うことで、内容液の残液がパウチ内の未シール部２３に溜まることがなく、更に良好な詰め替え作業を行うことができる。

【００４６】

また、上述した実施形態では、各流路制御シール部２２が装着シール部（斜縁シール部

２１ｄ）に連続して形成されているものとして説明したが、流路制御シール部２２の具体的態様についてはこれに限定されず、図８に示すように、装着シール部（斜縁シール部２１ｄ）から独立して離れた位置に、各流路制御シール部２２を形成してもよい。

また、上述した実施形態や変形例では、各流路制御シール部２２が、装着シール部に対して連続または独立した１つのシール部から構成されているものとして説明したが、各流路制御シール部２２を、装着シール部に対して連続または独立した２つ以上のシール部から構成してもよい。

【００４７】

また、流路制御シール部２２の具体的形状は、如何なるものでもよく、例えば、図２に示す例では、各流路制御シール部２２の内側先端部がＲ状（丸く）に形成されているが、図９に示す例のように、各流路制御シール部２２の内側先端部が鋭角に形成されていてもよい。

【００４８】

また、上述した実施形態では、各流路制御シール部２２が、仮想線Ａを基準として左右に形成されているが、この各流路制御シール部２２は、左右対称、或いは互いに異なる態様で形成されていてもよい。

【００４９】

また、変形例として、図１０に示すように、パウチ本体２０に、指で押える位置を示す位置マーク２４を設けてもよい。この位置マーク２４は、仮想線Ａ上において、一対の流路制御シール部２２よりも（約５ｍｍ～２０ｍｍ程度）パウチ平面方向の内側（中央側）に位置する箇所Ｐを含むように形成され、更に好ましくは、箇所Ｐを中心として形成されている。このような形態とすることにより、内容液の注出の中断もしくは再注出をする際に、最適な位置を指によって確実に押さえる、或いは開放することができる。なお、位置マーク２４の具体的態様については、フィルムの表面に印字を施したものや、フィルムにエンボス加工を施したもの等、外部から視認可能なものであれば、如何なるものでもよい。

【００５０】

また、本実施形態においては、スパウト取付基部３１ａを菱形形状のものとして説明したが、スパウト取付基部３１ａは公知の何れの形状を用いてもよい。

【００５１】

また、変形例として、図１１や図１２に示すように、使用者によるスパウト付きパウチ１０の把持位置を示す把持部２５を設けてもよい。

【００５２】

把持部２５の形成位置については、使用者によるスパウト付きパウチ１０の持ち方を誘導可能なものであれば如何なる位置でもよいが、スパウト３０が、上縁部および第１の側縁部の間の角に形成された斜縁部、上縁部（特に、上縁部の中央よりも第１の側縁部寄りの部分）、または、第１の側縁部（特に、第１の側縁部の中央よりも上縁部寄りの部分）に装着されている場合には、図１１に示すように、把持部２５を第２の側縁シール部２１ｃに形成することが好ましく、特に、第２の側縁シール部２１ｃの中央よりも下縁部２１ｂ寄りの部分に、把持部２５の中心または把持部２５全体が位置するように把持部２５を形成することが好ましい。

【００５３】

そして、上述した位置に把持部２５を形成することにより、把持部２５近傍の図１１のＡ箇所を使用者の一方の手（例えば右手）で把持すると、使用者の他方の手（例えば左手）でスパウト付きパウチ１０を支持する箇所が、スパウト３０近傍の図１１のＢ箇所に自然と誘導される。そのため、使用者がスパウト付きパウチ１０を持ち上げつつも、スパウト３０近傍において、上述したフィルム離間領域Ｒの外縁の先端側を指で挟むことが可能な持ち方に、使用者を誘導することができ、使用者が内容液の注出の一時停止や内容液の注出の再開を容易に操作することができる。

【００５４】

また、把持部２５の具体的態様については、使用者がスパウト付きパウチ１０を容易に把持することが可能なものであれば、如何なるものでもよく、例えば、図１２（ａ）～（ｄ）に示すように、第２の側縁シール部２１ｃの一部領域を（部分的に）囲むようにスリット２５ｂを形成することで、把持部２５を構成してもよく、これにより、スリット２５ｂによって囲まれた部分に使用者の指を挿入することができる。また、図１２（ｅ）に示すように、第２の側縁シール部２１ｃに１つまたは複数の孔２５ｄを形成することで、把持部２５を構成してもよく、また、図示はしないが、パウチ本体２０の一部を肉厚に成形した肉厚部を形成することで、把持部２５を構成してもよい。

【００５５】

また、図１１や図１２に示すように、第２の側縁シール部２１ｃに未シール部２５ａを形成し、この未シール部２５ａ内にスリット２５ｂや孔２５ｄを形成してもよく、この場合、未シール部２５ａにおいては表裏のフィルムが溶着されていないため、スリット２５ｂや孔２５ｄに挿入された使用者の指に対するフィルムの当たりを柔らかくすることができる。

また、図１２（ｃ）、（ｄ）に示すように、スリット２５ｂの外周側に、スリット２５ｂに連続する複数の切り込み２５ｃを形成してもよく、この場合、スリット２５ｂに挿入された使用者の指に対するフィルムの当たりを更に柔らかくすることができる。

【００５６】

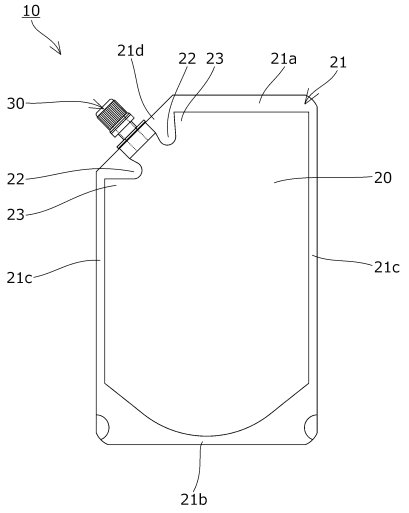
また、上述した実施形態では、仮想線Ａの延在方向におけるスパウト取付基部３１ａからの左右両側の各作用点部２２ａの距離（Ｌ）が同一であるものとして説明したが、各作用点部２２ａを仮想線Ａの延在方向にずらして形成してもよい。

【符号の説明】

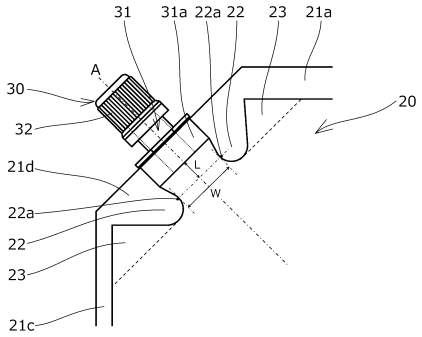
【００５７】

１０　・・・　スパウト付きパウチ
２０　・・・　パウチ本体
２１　・・・　外縁シール部
２１ａ　・・・　上縁シール部
２１ｂ　・・・　下縁シール部
２１ｃ　・・・　側縁シール部（第１の側縁シール部、第２の側縁シール部）
２１ｄ　・・・　斜縁シール部（装着シール部）
２１ｅ　・・・　第２の斜縁シール部
２２　・・・　流路制御シール部
２２ａ　・・・　作用点部
２３　・・・　未シール部
２４　・・・　位置マーク
２５　・・・　把持部
２５ａ　・・・　未シール部
２５ｂ　・・・　スリット
２５ｃ　・・・　切り込み
２５ｄ　・・・　孔
３０　・・・　スパウト
３１　・・・　スパウト本体
３１ａ　・・・　スパウト取付基部
３２　・・・　キャップ
Ａ　・・・　仮想線
Ｒ　・・・　フィルム離間領域

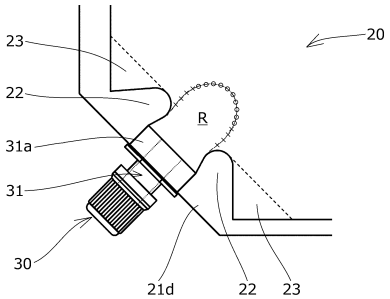
【図１】



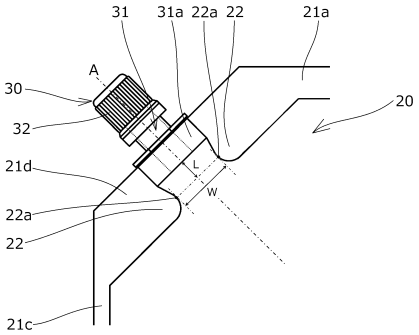
【図２】



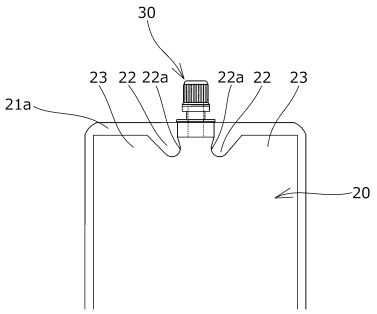
【図３】



【図４】



【図６】



【図５】

未シール部あり

		幅W					
		x1.0(12mm)	x1.2(14mm)	x1.5(18mm)	x1.6(19mm)	x2.0(23mm)	x2.2(26mm)
長さL	x0.2(2mm)	×/○	×/○	×/○	×/○	×/○	×/○
	x0.3(4mm)	○/×	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○
	x0.4(5mm)	○/×	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○
	x0.9(11mm)	○/×	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○
	x1.5(18mm)	○/×	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○
	x1.7(20mm)	○/×	○/×	○/×	○/×	○/×	×/○

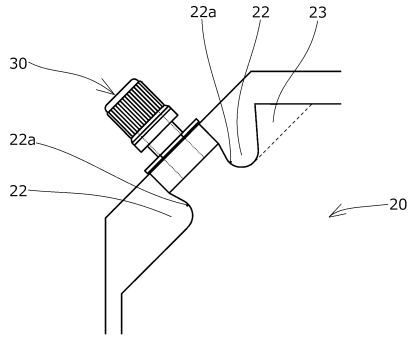
※「中断性／再注出性」

未シール部なし

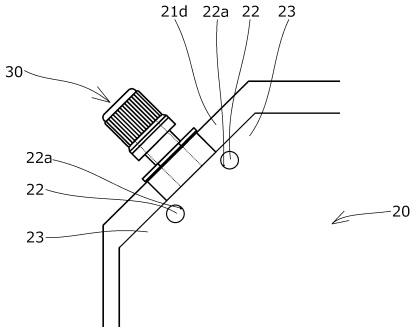
		幅W					
		x1.0(12mm)	x1.2(14mm)	x1.5(18mm)	x1.6(19mm)	x2.0(23mm)	x2.2(26mm)
長さL	x0.2(2mm)	×/○	×/○	×/○	×/○	×/○	×/○
	x0.3(4mm)	○/×	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○
	x0.4(5mm)	○/×	○/○	○/○	○/○	○/○	×/○
	x0.9(11mm)	○/×	○/△	○/△	○/○	○/○	×/○
	x1.5(18mm)	○/×	○/△	○/△	○/△	○/○	×/○
	x1.7(20mm)	○/×	○/×	○/×	○/×	○/×	×/○

※「中断性／再注出性」

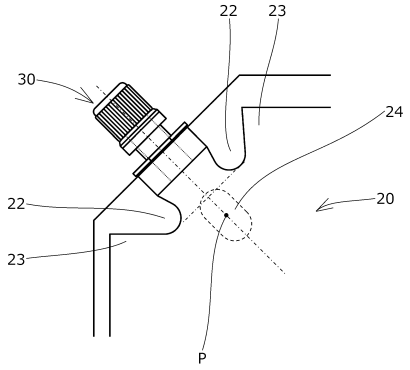
【図７】



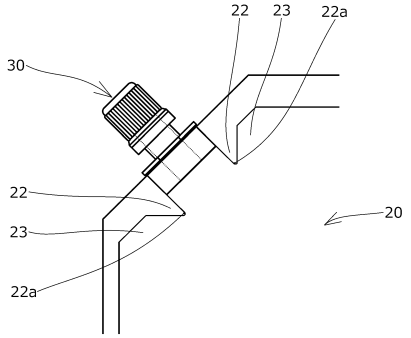
【図８】



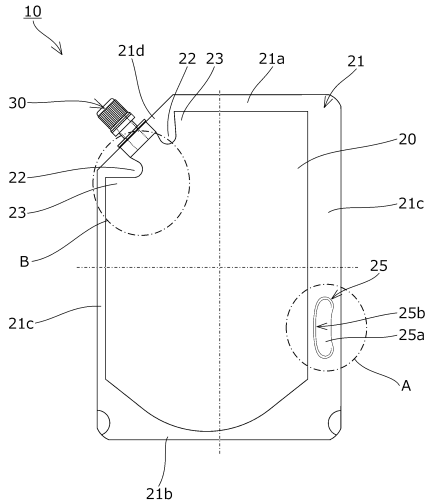
【図１０】



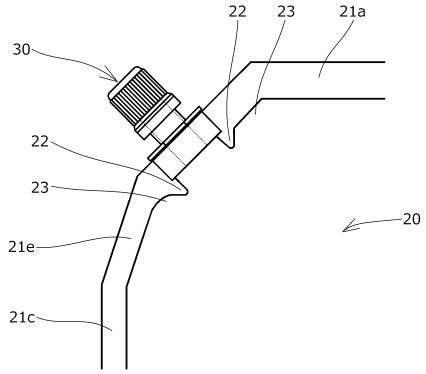
【図９】



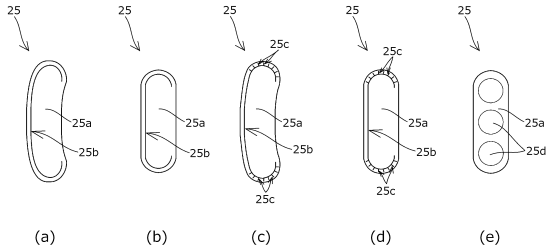
【図１１】



【図１３】



【図１２】



フロントページの続き

(72)発明者　金田　禎二郎
東京都品川区東五反田２－１８－１　東洋製罐株式会社内

審査官　増岡　亘

(56)参考文献　特開２０１０－２２８７６４（ＪＰ，Ａ）
特開２００８－３７４７１（ＪＰ，Ａ）
特開２０１４－１１８１９５（ＪＰ，Ａ）
特開２００３－１３７３１８（ＪＰ，Ａ）
国際公開第２０１２／０９０５３６（ＷＯ，Ａ１）
特開２０１５－６３３３２（ＪＰ，Ａ）
国際公開第２０１１／０４３１４９（ＷＯ，Ａ１）
特開２００４－１８６７（ＪＰ，Ａ）
特開２００４－６７１４２（ＪＰ，Ａ）
特開２０００－４３９０２（ＪＰ，Ａ）

(58)調査した分野(Int.Cl.，ＤＢ名)
Ｂ６５Ｄ　　３３／３８